

# トランスジェンダー

## をいきる

( 1 )

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

## 1 はじめに

「自己」を研究素材とした一風変わった修士論文を中心に

「修士論文」と聞くと、執筆者も読者もなんとなく固いイメージがある。実際、私も 2011 年度に修士論文を執筆したときは、毎日机にへばりつきながら、パソコンの音声ソフトを利用して、ああでもなく、こうでもない、というように、顔の表情を堅くしながら書いていた。

しかし、私の場合、そのような堅い表情で書いていても、ある種の楽しみや発見を見出すことができた。それは、修士論文の研究素材になっているのが、「自己の男性性エピソード」だからである。

この修士論文は、視覚障害・FtM (Female to Male 身体・書類上は社会的に女性、ジェンダーは男性) トランスジェンダーの自己のライフストーリーの中で、日常生活のさまざまな場面において、常に社会に内在する「男らしさ」を意識しながら、その一方で、「男らしさ」に対して矛盾や葛藤を抱き、そのつど問題提起しながら、社会との共生や再統合に焦点を当てた自分史を、自己物語を通してエピソード分析をした当事者研究である。したがって本論文は、男性性の自分史に焦点を当てたエピソードを中心に記述していながらも、そこから社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとしているのである。この「自己

の男性性エピソードから、社会に内在する普遍的なテーマを見出そうとする試み」が、この修士論文の一風変わった特徴であり、これから連載していく内容も、かなりインパクトが強いものと考えられる。

#### エピソード記述としての「自己物語の記述」

自己の男性性エピソードを、ただエピソードとして記述しただけでは、社会に内在する普遍的なテーマを見出すことができないばかりか、「個人の問題」と捉えられ、「問題の個人化」に繋がる。社会の普遍的なテーマを見出すには、自己のエピソードに、一定のストーリー性を持たせることが必要だ。

そのエピソード記述として試みたのが、「自己物語の記述」である。この「自己物語の記述」の手段として、「自己内対話」を取り入れた。「自己内対話」とは、もともと複数存在している自己のあり方を、あえて2人の自己に象徴化させた上で、その2人の自己の対話によって、これまでの自己の男性性エピソードについて、インタビュー形式で対話し、それを対話文として自ら記述していくことによる自己省察を主目的に編み出した方法である。この記述方法は、単なる自分史の中から、時間軸に沿って男性性を構築していったプロセスを記述するのではなく、それぞれの体験が構造化されていく中で、単なる私個人の体験ではなく、社会の普遍的なテーマも含めた「ハイライト化された男らしさ」として記述しているのである。

ここでは、自己の男性性エピソードと、そのエピソードを記述している「自己」との間に、一定の距離を置くことで、自己の男性性エピソードを客観的な視点で捉え返すことによって、問題を社会化し、「怒る」、「怒鳴る」などの一見「不の感情」とされる事柄をも赤裸々に物語ってしまうことができる。ただし、そこに至るまでには、自己の男性性エピソードや、それに伴う一見「不の感情」とされている事柄を、個人化するのではなく、社会化するという明確な目的がなければ達成できないことにも留意したい。

また、応用人間科学研究科の授業のひとつであるドラマセラピーという芸術療法による演出や場面設定・集団精神療法によるグループ内での笑いの共有という重要な要素を、「自己内対話」に取り入れたことで、相互に笑いを引き出すことによる本音の部分への気づきや、思わぬ質問から生じる議論の深まりや感情のもつれなどを、ありのままに可視化しながら記述したことも、「自己物語の記述」の特徴である。

#### 「自己内対話」の基本になっている自己の「多声性」と「ドラマセラピーの授業」

では、「自己物語の記述」だけで、果たして、自己の男性性エピソードと、それを記述している自己との間に、一定の距離を置き、一見「不の感情」とされている事柄をも客観的な視点で捉え返した上で、赤裸々に物語ってしまうことができるのだろうか。ここで重要になってくるのが、「自己物語の記述」の手段になっている「自己内対話」である。

前述したように、「自己内対話」は、もともと複数存在している自己の中から、あえて

二人の自己に象徴化させている。この「自己内対話」の基本になっているのは、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという事情から、自己の人生が、現在でも常に「多声的」であるからだ。この「多声的」というのは、思春期という不安定な時期に起こりやすいが、視覚障碍・FtM トランスジェンダーという、社会的マイノリティーな状況の中で、常に社会の矛盾や葛藤を覚え、問題提起しながらも、その一方で、社会との共生や再統合を図ろうとしている。つまり、思春期のような不安定な状況が、中年期に差し掛かった現在でも継続しているため、常に自己の中で、多声的な状況が、自己の人生の中心を占めている。

しかし、そのような状況をただ不安定視するのではなく、修士論文では、複数の声を、以下の二人の自己に象徴化させてみた。

身体・ジェンダー共に男として一致している理想の男像である「ザ・オトコ」(インタビューA)は、身体・ジェンダー共に男の視点で自己を眺めながら、男性性のエピソードを客観的に浮かび上がらせる質問をしている想像化された自己である。したがって、あくまで「想像化された自己」であるので、厳密にはその男性性に誇張性・捏造性が多分に吸引されている。一方、身体は女・ジェンダーは男と言う2つの性別の間を常に揺れ動く現実の自己「FTM トランスジェンダー」(インタビューB)は、そのようなAの質問に悩み、困惑し、時には怒りをぶつけながらも、今まで構築してきた自己の男性性を、語りの中で振り返っているリアルな自己である。したがって、社会の環境や意識・法制度などによって、常に「間」を揺れ動く存在であり、境界人であるからこそ見えてくる脆弱性・フラジヤイルな部分を常に意識させられている。このようなドラマ的なディスコースによって、AとBの人間的な対話を通して、多声的な声が相互に対立している声ではなく、交響音楽のように調和の取れた和音として響きあっていく複数の声として再統合されるプロセスを踏むことを目指そうとしている。ちょうど、1曲の音楽を2パートに分けて、お互いの声を聞きあいながら合唱するという感覚である。

「対話的自己物語」から見えてきた、自己特有の男性性

「自己物語の記述」は、対話的自己物語として成立した。この成立の背景は、創造された男らしい自己「ザ・オトコ」(A)」と、現実の自己「FtM トランスジェンダー (B)」の二項対立的な特徴を浮かび上がらせた。

その結果、男性性エピソード分析のために創造かした「ザ・オトコ」(A)」の存在によって、「FtM トランスジェンダー (B)」が構築してきた男性性の中に、通例であれば気づかない男性性を浮かび上がらせ、自己物語の記述によって可視化することで更に明らかになった。つまり、「FtM トランスジェンダー (B)」のライフストーリーにおいて、常に男性同士のホモソーシャルな関係性を意識していたり、どのような些細な現象からも、時には一般に女性性の高い行動様式とされる事柄からも、男性性を見出そうというセンシティブな心性が浮かび上がってきた。(詳細については次回以降に連載する)そこには、自己の女性または女性性嫌悪に繋がる表現によって、より男性性を構築しようとする心性が明らかにな

っている。このため、自己の中の女性性を不のイメージとして誇張している表現が多いが、それは自己の中にあつた誇張された男性性が内面的にイメージされていた女性または女性性嫌悪の性質を含んでいるからである。この誇張された男性性は、社会によって構築された男性性・自己によって構築した男性性・更に男性性を追求するあまり、誇張せざるを得なかった男性性など、さまざまな性質を持つ男性性の集合体であり、現実の男性性との調和を図ろうとしている作業を通して、自己の入り乱れた男性性が明確になったことで、女性または女性性嫌悪に繋がる表現が多用されていることに気づかされた。このこと葉、視覚障碍・FtM トランスジェンダーの自己のライフストーリーに置いて、「視覚障碍」と、「女性の身体」を不のイメージと位置づけた上で、誰よりも強く男手あろうとした結果であろうと考えられる。

終わりに 次回からの連載に向けて

冒頭でも詳述したように、この修士論文の目的は、自己の男性性エピソードを記述しながらも、それを単なる自己の体験だけに留めることなく、社会問題との関わりの中で、自己の体験から浮かび上がってきた問題を社会化することにある。したがって、「対人援助学マガジン」でも、できるだけ修士論文の目的に沿って連載していきたい。ただし、連載の内容については、修士論文では扱わなかったことも取り入れてみようと考えている。

この連載は、手記でもなく、日記でもなく、単に時間軸に沿った自分史語りでもなく、病語りでも病気語りでも、ましてや障碍語りでもサクセス・ストーリーでもない、自己の男性性変容のプロセスを通した確かな当事者研究として位置づけておきたい。